

## 「タルテュッフ」問題の経緯

徳 村 佑 市

ルイ14世は若く、権勢をもち饗宴を好んだ。この饗宴はこれまで彼に反対していた諸侯に政治を忘れさせ、懐柔するためでもあったが、同時にそれは彼の若さの現れであり、歓楽を求める心の現れであった。彼は治世中多くの饗宴をもよほしたが、その中でもその規模と豪華さで特筆されるのは1664年5月7日から13日までヴェルサイユで催された「魔法島歓楽」Plaisirs de l'Île enchantéeであった。これは母后アンヌ・ド・オトリッシュと王妃マリー・テレーズを慰めるというのが表向きの目的であったが、その実は1662年の秋以来ルイ14世の寵を一身にあつめていたド・ラ・ヴァリエール夫人を楽しませるためのものであった。この饗宴の第6日目、即ち5月12日月曜日モリエール座は王と客の前で「タルテュッフ」Tartuffe 或は「偽善者」L'hypocrite ①という三幕の新作を演じた。モリエールの5年にわたる戦いはここにはじまるのである。

これに先だつ4月17日、信者の秘密結社である「聖体秘蹟協会」Compagnie du Saint-Sacrementの会員がラヴァル侯爵邸に集った。そこで会員の一人から宗教を脅かそうとしている危険、即ちしがたい職業の著者がある喜劇を書いて、僧や教導者を滑稽な、おぞましいものとしてえがき、それを演じようとしていることについて報告があった。そして人々はいかなることは放置出来ないとし、あらゆる手段で干渉し、これが実現されないようにすることで意見が一致した。これについて協会の修史官アルジ

ャンソンの伯爵、ルネ・ド・ヴォワイエ・ド・ポールミイは次のように書いている。「人々は『タルテュッフ』という邪悪な劇の禁止のため働くことを強く話した。各人はその上演を妨げるため宮廷に多少とも信用ある友人たちにそれについて語ることを引きうけた。」②

しかし人々はこの作を饗宴で上演させるのを妨げることが出来なかった。しかしそれが一度上演されるとそれに反対する人々が動き出した。パリの大司教アルドゥアン・ド・ペレフィクスは「聖体秘蹟協会」の会員ではなかったが、「聖体秘蹟協会」の人々におされて王のほとりに「タルテュッフ」の禁止について運動した。彼はルイ14世の昔の師傅でもあったので、王は彼に耳を傾けねばならなかったであろう。更に信者となっていた母后アンヌ・ド・オトリッシュのより強い影響があったものと思われる。ともかく王は「タルテュッフ」を饗宴で一度上演させたきりで市中での公演を禁止することにした。ラ・ガゼットの5月21日号はヴェルサイユの饗宴の話に16頁をさいた。それは組織者サン＝ティニャン侯爵、「我々の熟達したオルフェ」であるリュリイ、「機械のために実力以上を出した」ヴィガラニに賞讃をさしげたが、モリエールについては「その筋がみやびやかである」作品を上演したということにとどまっている。この同じラ・ガゼットは5月17日号で「陛下はすべての事に完全に明るくあらせられ、宗教に対して全く有害で非常に危険な結果を生む可能性がある」と判断された「偽善者」l'Hypocriteと

いう劇を（パリで）上演させるのを禁止されたことによって……」と書いている。③しかしこのラ・ガゼットは創設以来ジェズエイトの手にあるものであった。④

饗宴に関する敘述はこれを次のように述べている。「夜（即ち1664年5月12日の夜）陛下はモリエールが偽信者にあてつけて作った『タルテュッフ』と題する喜劇の最初の三幕を演ぜしめられた。国王はそれを大変面白いとお思いになったが、真の信仰によって天上世界に到る途上に置かれた人物と、善行に対する空虚な街気が悪行を犯すのを少しも妨げないような人物とは多くの点で合致することを御存知であり、宗教に関する事柄に対する自己の極度の敏感さは、混同される可能性のある悪徳と美德とのこの相似を忍ぶ能わざることを承知あらせられて、著者の良き意図は疑われなかったけれども、この喜劇が完成され、それを判断する能力のある人によって検討されるまでは公衆に向けてそれをお禁じになり、正しい判断を下す能力の少ない他のものがそれを見る楽しみを濫用しないように、自分でもその楽しみをお慎みになった。」

このようにして「タルテュッフ」はパリでの公演を禁止されたが、信者たちはそれで足れりとせずモリエールに攻撃を加えてきた。ソルボンヌの博士で、サン＝バルテルミイの教区の司祭ピエール・ルーレ Pierre Roullé（又は Roullès）は1663年以来「光栄の人、別名永遠の光栄により人間の到達しうる最高の完成」L'homme glorieux, ou la dernière perfection de l'homme achevée par la gloire éternelle という本を準備し、1664年4月24日出版のため国王の允許をとっていたが「タルテュッフ」事件が起ると、「世界における輝かしき国王、別名世界の

すべての国王中最も輝かしきルイ14世」Le roi glorieux au monde, ou Louis XIV le plus glorieux de tous les rois du monde. という題で国王をたゝえ、モリエールを非難する一文を草して前書の巻末に付することを時宜を得たことと判断し、両者をあわせて8月1日に印刷を完了した。彼はその中でもリエールを「肉を着、人間の皮をかぶった悪魔」と呼び、「タルテュッフ」を「すべての教会を嘲弄し、最も聖なる性格と最も神々しい役目を無視して、魂の成聖のため救世主によって命ぜられた教会における最も聖なるものを無視して、その慣用を滑稽な、軽蔑すべき、いやらしいものにするために」モリエールがその悪魔的精神からひき出した所産であるとし、そしてこのような作者は「かくもひどい大逆罪をつぐのうために、みせしめのための公けの極刑、そして地獄の火の先ぶれである火刑に値する。」⑤と言っている。

こうした攻撃をうけてモリエールは国王に対し「第一の請願書」を提出した。その中で彼は次のように言っている。「この作品の禁止は私にとりましては痛手であったとは申せ、私の不幸は陛下がこの問題につき意のあるところを御説明下さいました、その御態度によって和らげられました。陛下、私は、この喜劇を公けに披露することを禁じはしたが、そこには何ら非難すべきものはないと御明言下さる御好意をいたぐきましたことによって、陛下は私が愁訴申しあぐべき一切の理由を御排除下さったのだと信じたのであります。」ピエール・ルーレは「タルテュッフ」を禁止したことについて王をほめたゝえており、又モリエールは王が自分に好意的であったが周囲の事情でやむなくこうなったのだと述べている。どちらが王の真意に近かったのであろうか。これに関しては上に引用した饗宴

に関する敘述，即ち「国王はそれを大変面白い  
とお思いになったが，真の信仰によって天上世  
界に到る途上に置かれた人物と……」がこの問  
題に対する王の態度を最も正確につたえている  
と思われる。⑥

王はモリエールに対する好意を失いはしなかつたが，この「タルテュッフ」の上演禁止は一座にとっては手痛い打撃であった。「女房学校」*L'Ecole des Femmes* は1662年12月に初演され，1663年の1年間は殆どこれによって観客をつなぐことが出来た。この作品はいわゆる「喜劇戦争」の発端となったもので，モリエールの側からも敵の側からも作品の応酬があつていやが上にも世間の関心をさそつたものであつた。しかし一座はもうそろそろ新作を出さねばならないころであつた。そしてその新作としてモリエールが想をねって創作したものが「タルテュッフ」であつてみれば，これの上演禁止は手痛い打撃であつた筈である。「タルテュッフ」の上演禁止によってモリエールの不道徳，不信心の噂さがひろまり，前に「女房学校批判」*Critique de l'Ecole des Femmes* を捧げられてモリエールを保護した母后も手を引く有様であつたが，とりわけ一座にとって痛手であつたのは金銭上の損害であつた。一座の手持ちの作品としては「エリード姫」*Princesse d'Elide* があつたが，これは「魔法島歓楽」のため急いで書かれた宮廷用音楽劇で，音楽，バレエつきのこの種の劇は舞台装置や囃子に金がかゝりすぎて市中公演向きではなかつた。ラシーヌ *Racine* の「テバイード」*Thébaïde* があつたが，ラシーヌはまだ新人で未知数であり，それに初日後4日でこの「テバイード」は作者の裏切りによって競争相手のオテル・ド・ブルゴーニュ座へ持って行かれてしまった。

国王は饗宴の終つた翌日，即ち5月24日にヴェルサイユからフオンテヌブロオの王宮に赴き，8月13日までそこに滞在した。一座は5月22日までヴェルサイユにとどまり，それからパリへ歸つたであろう。そしてモリエールは「タルテュッフ」の上演禁止の命令の取消しを求めするために，パリからフオンテヌブロオへ旅したであろう。ルイ14世はモリエールの言うところを聞くと同時に，上演を許可しがたい所以をよく言つてきかせたものと推測される。

この「タルテュッフ」の上演禁止は王と作者との間にあつた寵愛と奉仕との関係をかえるものではなかつた。王はモリエール的一座への好意を示すことを忘れず，7月に法王特使キギをもてなそうとした時にも一座をフオンテヌブロオへ呼びよせた。そして7月21日から8月13日（王がフオンテヌブロオを離れた日）まで24日間に一座はそこで「エリード姫」4回，「テバイード」を1回上演したと言われる。この法王特使のキギは法王の甥であつたが，演劇に関してはボスュエやブルグルーのような偏見を持たず，恋以外にほとんど語られないこの「エリード姫」を見て大変満足したと言われる。⑦モリエールはこの機会をとらえようと思つた。彼はイタリーの教会がフランスのそれほど演劇に対してきびしくないことを知つていたので，これを利用して宗教側からの攻撃に対して，同じく宗教側からの好意的判断を期待したのである。モリエールは法王特使の前で「タルテュッフ」を朗読することを願い出て許され，それを法王特使や随行の僧正たちに読んできかせた。そして結果はモリエールが期待した通りで，彼らは皆，王のこの作品に対する好意的な判断を支持したのである。王はその事を知らないわけではなかつたが，それによつて方針をか

え、「タルテュッフ」の上演を許可するようなことはしなかった。この間の事情を前にあげた「第一の請願書」は次のようにのべている。「又私が自作の特別朗読を行いました節、一人のこらず陛下の御意見に一致すると申されました法王使節猥下ならびに随行の僧正の大多数の方々の御承認にもかかわらず……」

このように「タルテュッフ」のパリ市中での公演は禁止されていたが、特別な朗読は禁止されていなかった。禁ぜられたものを見たさに皆人はモリエールに会いたがった。ボワロオは1665年に作られた「諷詩」Satire 第三の Repas ridicule で、主人はお客を誘うために、「モリエールは『タルテュッフ』をひっさげてそこで自分の持役を演ずるはずだ。」と言ったと述べ、さらに彼は1701年の版でそれに次のような説明的注をつけた。「その当時『タルテュッフ』は禁ぜられていた。すべての人がその朗読を聞くためにモリエールに会いたがった。」⑧その他1664年8月26日には「真理の女友達」、即ちロングヴィル夫人かサブレ夫人のところで朗読があったと言われる。又同じ頃アカデミシヤンのアンリ・ルイ・ユベール・ド・モンモールのところでメナージュやシャプランその他の前で朗読があり、又時期はつまびらかではないが、すべての朗読の最初のものが⑨＝ノン・ド・ランクロのサロンで行われたと言われる。

パリ市内における公演は禁ぜられていたが、私的な上演は許されていた。モリエールの一座は1664年9月20日から27日まで、ヴィレール＝コットレのモリエールの庇護者、王弟オルレアン公の許へ招かれた。一座はそこで7つの作品を演じたが、「タルテュッフ」三幕は9月25日に演ぜられている。王弟が一座を招いたのはルイ14世と母后を慰めるためのものであった

が、母后は同月18日にヴィレール＝コットレを出発しているのでこの「タルテュッフ」上演は見えていないし、王もそれに立合ったかどうかさだかではない。「タルテュッフ」は25日に演ぜられたが、ラ・ガゼットによれば王は24日に、ロレによれば25日にヴィレール＝コットレから帰っている。⑩又1664年11月29日にはランシイなるパラティーヌ大公妃のところでコンデ大公の命令で「タルテュッフ」が演ぜられた。しかし今度のはラ・グランジュの「帳簿」や、1682年版全集の前書におけるラ・グランジュの言を信すれば、「完全な5幕からなる」ものであった。1年後の1665年11月8日にも、再び同じ場所で、同じ観客の前で「タルテュッフ」が演ぜられた。

1664年10月19日より24日まで、一座は王の好意でヴェルサイユへ呼ばれ、10の喜劇を上演し、その際3000リーヴルをうけとっていった。⑪

このように王やその他の庇護者の好意はあったが、こうした非公開の公演で満足しなかったモリエールは、1665年2月15日に初演された「ドン・ジュアン」の中で、「偽信は流行の悪徳だ。そして流行の悪徳なら、何でも美德として通用するんだ。…」(第5幕第2場)と信者たちの圧力で「タルテュッフ」を禁止された鬱憤の一部をもらしている。この「ドン・ジュアン」が又物議をかもした。それは無神論をとるものだと非難され、2日目から早くも一部を改訂上演せねばならなかった。⑫4月8日にはロシュモン氏ことB・Aと署名した「石像の饗宴と題するモリエールの喜劇に関する意見」Observation sur la comédie de Molière intitulée le Festin de Pierre par B. A., Sieur de Rochemont が現れ、モリエールを「受肉せる悪魔」「この世紀或はこの世界がキリスト教会に対し

て生み出せる最悪の敵」ときめつけ、ルールにもおとらぬ調子で攻撃している。⑬しかしこうした攻撃にも拘らずルイ14世は「ドン・ジュアン」を禁止しなかった。モリエールはそれを15回公演した後、復活祭の休演に入り、それで上演をうちきり、それ以後再び舞台にのせなかった。又出版もしなかった。

モリエール一座は1665年6月12日から14日まで王にヴェルサイユへ招かれ、その数週間後に王より恩恵のしるしを受けた。1665年8月14日金曜日一座はサン＝ジェルマン＝アン＝レへ行った。王はそれまで王弟の劇団であったモリエール一座を王弟からゆすりうけ、今後自分に属する国王の劇団 *Troupe du Roi* にしたいと王弟に求めた。そして王は同時に一座に6000リーヴルの年金を与えた。一座は変らぬ保護をたまわらんことを求めながら王弟にいとまごいした。この事実は「タルテュッフ」の禁止によってうちひしがれていたモリエールを勇気づけるものであるとともに、信者達に対して王がモリエールに変らぬ好意を持つことを示すものであった。

信者達はたしかに旗色が悪くなりつつあった。1666年1月30日には宮廷における信者たちの支柱であったアンヌ・ドオトリッシュが死に、もう1つの支柱であったコンチ大公もこれと前後して他界した。1665年モリエールの親友ボワロオは「国王に奉る辞」 *Discours au Roi* の中で、信者たちは作者が彼らをえがくという噂を聞いただけですべてがひっくりかえるとふれまわり、そういう作品は忌むべき怪物だと言いつらしているが、

卑劣な傲慢におゝわれた彼らの精神が、  
きびしい美德の外套が身をつゝんでも無駄である、

自らを知り、光りをのがれる彼らの心は  
神を嘲弄しても「タルテュッフ」とモリエールをおそれる。

と言っている。

「タルテュッフ」の評判は外国へも及んだ。スエーデンのクリスチナ女王はローマに定住し、その宮殿の中に小さな劇場を持って、そこで喜劇を演じさせていたが、「タルテュッフ」の噂を聞いて是非見たいと思い、その図書係に外務卿リオンヌに対して手紙を出させた。これに対し外務卿は1666年2月16日付の公文書で、「タルテュッフ」は未完成の作品であり、お求めにこたえることは自分のみならず王にも出来ない。なぜならモリエールがそれを上演した場合に得るであろう莫大な利益をうばわれないためにそれを公表したとしないだろう。王自身も禁止した作品である手前、それを他人に見せろとは言にくいと言ってことわっている。⑭

1667年王がフランドルの戦役に出発する時、モリエールを保護していた王弟妃は7月31日⑮に「タルテュッフ」を彼女のところで私演する許可を王に求めて許されていた。さらに有利な瞬間に王弟妃は王にたのんで、「タルテュッフ」をパレ・ロワイヤル座で公演する許可もとったと言われる。この有利な瞬間というのは、プロセットによれば、王がジャンセニスムの進出をおそれ、王をヴァリエール嬢やモンテスパン夫人からひき離そうとする幾人かの司教の懇願にいらだたされ、悩まされていた瞬間をいうのであろう。事実これらの司教の一人であるサンスの大司教パラダイヤン・ゴンドランはモンテスパン夫人の叔父であって、彼はあらゆる機会に彼の姪と王との罪ある厚情を非難していたが、ある日議論と非難の末、彼は彼女に平手打

をくわしたと言われる。そこで人は彼をその教区に追返し、そこから出ることを禁じたが、彼は今度は破門すると言って王とその情婦をおびやかしたと言われる。⑩ともかくルイ14世は5月16日サン・ジェルメンの王宮からフランドルへ向けて出発したが、その前に王弟妃の願いにより「タルテュッフ」の公演を許されたものらしい。しかし当時モリエールは病床にあり、4月17日のロビネの新聞には「モリエールはまさに臨終にあり、柩に入るのも近いとの噂が行われた。」とある。⑪彼は6月10日になって再び舞台に立つことが出来た。こうしたわけで王の許可はあったが、「タルテュッフ」を公演することはおくれで8月5日金曜日に行われた。しかし今度は「タルテュッフ」という題名を「瞞着者」l'Imposteur と改め、主人公の名前もパニェルフとし、服装も一見して社交界の人とわかるように笹緑をつけ、テキストにも手心と削除を加えて上演された。上演は大成功で収入は1890リーヴルにのぼった。モリエールはこれに気をよくし、「翌日」も「瞞着者」を公演することを告げ、その広告もした。この「翌日」とは土曜日が劇場が休演なので、多分日曜日をさすと考えられる。⑫これより先、王が戦役に出発する時、王はパリの高等法院長ラモアニオンに留守中のパリの行政と警察権を委ねていた。ラモアニオンは「聖体秘蹟協会」の一員として悪い喜劇に戦いをいどんできた人であったので、彼は即座にこの作の上演を禁止することを決心し、初演の翌日（8月6日）執達吏を派遣して「瞞着者」の上演が禁止されたことを告げた。そしてプロセットの言を信ずれば、多分日曜日にパレ・ロワイヤル座の戸を閉し、そこに番兵を置いた。⑬

そこでモリエールは王弟妃に訴え、国王の意

志を高等法院長に伝達されるよう願った。そして王弟妃の臣下の一人ドラヴォが王弟妃の名代として高等法院長に会いに行ったが、彼はすべてをそこない、ラモアニオンに対する王弟妃の立場を危くした。ラモアニオンはドラヴォに自分は何すべきことを良く知っており、そして王弟妃に会いに行くと言うだけで満足した。事実3、4日後彼は王弟妃を訪問したが、彼の決心が固いことを見てとった王弟妃は「瞞着者」について話すことはその時期でもなく、得策でもないと考えたらしい。モリエールは自分で奔走する以外にないことを思い知らされた。彼の親友ボワロオはその廉直さと王の尊敬によってあらゆる所へ出入することを許されていて、ラモアニオンともかねて知り合いの間柄であった。そこでモリエールはボワロオに頼み、彼に伴われてラモアニオンに会いに行った。この訪問の日付は正確にはわからぬが8月の末のことであつたらしい。⑭ラモアニオンは礼儀正しく彼を迎えたが、彼の作品を認めることは拒んだ。彼は言った。「その作品が美しく、教訓的であることはわかります。しかしキリスト教の倫理や宗教のことで人々に教えるのはコメディアンの仕事ではありません。福音をとくことに手出しするのは劇場のすることではありません。」と。⑮そして王が帰還されたら王は自分の意志で事を解決されるだろう、自分としては求められるような許可を与えて自分に託された権威を乱用したくないと言った。モリエールは自分の立場を論じようとしたが、ラモアニオンの調子にくじかれて口ごもるだけで、高等法院長が投げ込んだ混乱をしずめることが出来なかった。こうして彼は目的を達することが出来ずラモアニオンの許を辞した。

8月8日モリエールは一座の俳優ラ・グラン

ジュとラ・トリリエールに「請願書」を持たせて、リール市の前に陣をはっていた王の許に派遣した。これが第二の「請願書」である。その中でモリエールは国王が上演を許可されたにも拘らず、その好意を享受することが不当にも妨げられた旨を訴え、パリ全体がこの上演禁止を憤慨していると記した後、「もしタルテュッフ連が勝利をしめるなら、私はもはや今後喜劇を作ろうなどと考えない。」と述べている。使者の一人のラ・グランジュは「我々は暖く迎えられ、王弟はいつものように我々を保護して下さった。陛下はパリへ帰ったら『タルテュッフ』を検討させ、そして我々はそれを演ずることになるだろうと言わせられた。それで我々は帰ってきた。この旅行は一座にとって1000リーヴルの出費であった。」とその「帳簿」Le Registre にしるしている。

この頃モリエールの称讃者が「喜劇『瞞着者』についての手紙」Lettre sur la comédie de l'Imposteur を出しモリエールの喜劇を擁護している。この小冊子は作者の名も出版者の名も場所の名もなく、8月5日の上演の2週間後に現れたものである。この小冊子の著者についてはいろいろの説もあるが、モリエールの手が加わっているという説もある。

王は9月7日に帰還したが、その間に、即ち先にものべたようにモリエールが王に運動している間に、パリではモリエールにとっては更に手痛い打撃が加えられた。それは8月11日にパリの大司教アルドゥアン・ド・ペレフィックスが大司教令をもって「本教区の一切の人に公たると私たるとを問わず、如何なる名目においても上記の喜劇を上演し、朗読又は聴取することを明かに禁止し、これを破った者は破門にす処る。」<sup>②③</sup>旨布告したことである。これはモリエ

ールが信頼していた王の言葉を無にするものだけにそれだけ恐しい打撃であった。なぜならその禁令はパリの教区民である王自身にも課せられるものであり、おまけにペレフィックスはルイ14世の師傅であった人であるからなおさらである。ルイ14世は一時はこの禁令に対して何かうつ手はないか考えたように見える。少くとも未知のある人（多分コルベールであろう。それがコルベールなら多分王に気に入られるためか又は王の命で動いたのでであろう。）が教会法学者バリユズにこの禁令の有効性を相談したと言われる。バリユズはかなりはっきりとこの禁令は正式に与えられたものではない、教会の権威は不名誉でも醜聞を起してもいないすべての劇作品を禁ずるところまでは及ばない、かつ破門は正しくても長つゞきする筈がなく、それが軽率になされ、人々によって守られないことを知るならば、それを与えた人によって撤去される筈だと言った。この意見にしたがって行動すれば困ったことも生じたであろうが、王はそこまでは行かなかった。<sup>②④</sup>モリエールは失望し、彼の劇場は8月6日に閉されたまま開かなかった。そして再び彼の劇場が開かれたのは7週間後の9月25日であった。ロビネは10月8日号の新聞の中で次のように書いている。<sup>②⑤</sup>

我々の町を魅惑するにちがいない

新しいことを私は忘れていた。

モリエールは勇気を取りなおし

嵐にもめげず

舞台に再び現れた。

どうか彼を見に行ってみよう。

いずれにしても1667年を病氣と苦悶のうちに送ったモリエールは1668年には「アンフィトリオン」「ジヨルジュ・ダンダン」「守銭奴」の三作を出して大いに活発なところを見せた。1

月5日にはチュイルリー宮に招かれて「嫌々ながら医者になれ」を、1月16日には「アンフィトリオン」を演じ、7月には新しく作られたヴェルサイユ宮の庭園でもよおされた饗宴で「ジョルジュ・ダンダン」を出し、11月のはじめには「守銭奴」をもってルイ14世にまみえた。②⑤要するにモリエールに対する王の行為は信者達の動きにも拘らず続いていたのである。さらに1668年9月20日コンデ大公はモリエールをシャンティイの城館に招いて禁ぜられた作「タルテュッフ」を上演させた。シャンティイはパリ大司教の教区には入らずサンリスのそれに入るが、同所はパリから目と鼻の間で、こんな所で禁ぜられた作を演じられてはパリ大司教の面目は丸つぶれであった。

1668年10月8日長年にわたった法王との争いの終末を意味し、教会の平和をうちたてたクレマン9世の教皇書簡がとどいた。1669年1月1日、和解の戻ったのを祝って造幣局で記念メダルが作られた。決定的な講和の教書は1669年1月19日ローマを発せられて月末にパリに届いた。バザン以来この宗教的平和とモリエールに与えられた「タルテュッフ」上演の許可の間には何らかの関係があるというのが定説になっている。

「タルテュッフ」上演の許可は2月5日火曜日に王より与えられ、劇団は即日これを上演した。この「タルテュッフ」の復活の記念すべき日に当り、モリエールは王に宛て、第三の「請願書」を出し、その中で遂に得た勝利を王に感謝するとともに、その恩恵に加えて、彼の友人の医者にもある恩恵を得たいと願って、王に対する或る程度のなれなれしささえ示している。そして今度上演された作はパニエルフの登場するものではなく、主人公の名前も元の通り

タルテュッフと改められたものであって、パリ市中に多くの興味と関心をひきおこした。2月9日付のロビネの韻文の手紙はこの復活した「タルテュッフ」に公衆がいかに押しかけたかを次のようにえがいている。②⑥

この場合、自然のように  
空虚をきらう  
好奇心は  
いかなる場所も残さなかったこと、  
息がつまる、もう駄目だと  
たえず叫ぶのをきいた  
おし合いの中で、多くが  
息のつまる危険を知ったということ、  
あゝタルトフフィウスさん、  
あなたを見るのぞみが  
生命がけであらねばならないか、  
かつていかなる喜劇も  
これほど喝采されなかった。

初日は2860リーヴル、2日目（2月8日）は2045リーヴルの収入があった。一座は復活祭の休み（4月9日）まで28回にわたって連続して同喜劇を上演したが、最初の13回の最も少い収入は1278リーヴルであった。復活祭後一座は「アンフィトリオン」で蓋をあけたが入りが悪かったので再び「タルテュッフ」を出し、6月25日までに15回、8月に3回、9月に2回出している。これには方々で行われた私的公演は入っていない。さらにこの作は1670年に18回、1671年に9回、1672年に5回上演されている。これがモリエールの生前の記録である。

1669年の初演の時の配役はロビネによれば次の通りである。②⑦

ペルネル夫人……………ベジャール  
オルゴン……………モリエール  
エルミール……………モリエール嬢



ダミス……………ユベール  
 マリアーヌ……………ド・ブリー嬢  
 ヴァレール……………ラ・グランジュ  
 クレアント……………ラ・トリリエール  
 タルテュッフ……………デュ・クロワジー  
 ドリーヌ……………ベジャール嬢

ロビネはロウィヤル氏と警吏とフリポットを演じた役者を記録していないが、デュ・クロワジーの娘ポワッソン嬢が1740年の「メルキュール・ド・フランス」誌に発表した追想記によってロウィヤル氏はド・ブリーが演じたことが知られ、警吏は同人が兼ね演じたものと推測される。フリポットは一座の雇人の中にフリポットなるものがあるから、作者はこれを本名のまゝ舞台に出したものと思われる。<sup>②⑧</sup>

「タルテュッフ」は長い序文を付して1669年3月（3月15日出版許可，3月23日印刷完了）作者の自費によって出版された。1部1エキュで売られたが、すぐ売り切れたので6月6日第2版が出た。これは著者によってジャン・リブッ書店にゆずられ、そこから出したものであった。

こうして長年にわたった「タルテュッフ」問題は落着した。モリエールの敵は沈黙したが、1670年のはじめに匿名の韻文の「タルテュッフ批判」Critique du Tartuffe が「『タルテュッフ』についての諷刺の手紙」を冒頭にのせて現われた。この手紙はモリエールは悪い詩人で、良いコメディアンであり、「タルテュッフ」の成功は偶然に負うもので、それが成功したのは禁ぜられたからであるということを述べているが、「タルテュッフ」の声価はすでに定っていた。

#### 注

① 「聖体秘蹟協会」の記事録や饗宴の公式敘述はそ

れを Tartuffe と呼び、ラ・ガゼットやロレは L'Hypocriteと呼んでいる。(Gustave Michaut: Les luttes de Molière, P. 33)

- ② Henri d' Almérás : Le Tartuffe de Molière, P. 22
- ③ ibid., P. 26
- ④ Antoine Adam : Histoire de la littérature française au XVIIe siècle Tom III. P. 295
- ⑤ Henri d' Almérás : Le Tartuffe de Molière, P. 81
- ⑥ Gustave Michaut : Les luttes de Molière, P. 42
- ⑦ Henri d' Almérás : Le Tartuffe de Molière, P. 110
- ⑧ ibid., P. 114
- ⑨ ibid., P. 115
- ⑩ Gustave Michaut : Les luttes de Molière, P. 46
- ⑪ ibid., P. 46
- ⑫ 小場瀬卓三：「タルテュッフ」研研，P. 159
- ⑬ ibid., P. 159
- ⑭ Henri d' Almérás : Le Tartuffe de Molière, P. 121
- ⑮ ibid., P. 143
- ⑯ ibid., PP. 143—144
- ⑰ 小場瀬卓三：「タルテュッフ」研究，P. 161
- ⑱ Gustave Michaut : Les luttes de Molière, P. 49
- ⑲ ibid., P. 49
- ⑳ Henri d' Almérás : Le Tartuffe de Molière, P. 145
- ㉑ Gustave Michaut : Les luttes de Molière, P. 49
- ㉒ 小場瀬卓三：「タルテュッフ」研究，P. 165
- ㉓ Gustave Michaut : Les luttes de Molière, PP. 51—52
- ㉔ Henri d' Almérás : Le Tartuffe de Molière, PP. 152—153
- ㉕ 小場瀬卓三：「タルテュッフ」研究，PP. 166—167
- ㉖ Henri d' Almérás : Le Tartuffe de Molière, P. 165
- ㉗ 小場瀬卓三：「タルテュッフ」研究，P. 169
- ㉘ ibid., PP. 169—170